

あの塔



あの塔 [1]

この町に引っ越してきてから、ずっと思っていた疑問。

東の空を見上げると必ず見える『塔』。

あれは一体なんだろう・・・？

林の向こうに見えるコンクリートの塔は、円筒状だが上部のほうが大きく、下にいくにしたがって細くなっていた。

マンション一棟くらいの大きさに思えるが、かなり遠くから見ているにもかかわらず、どっしりとした存在感があることを考えると、想像しているよりも巨大な建造物なのかもしれない。

同じ高校に通うハツミに訊ねてみたが、

「さあ～。なんやろな～」

と、あさっての方向を見ながら、気の無い返事をするだけ。

ハツミは生まれたときからこの町で暮らしているが、塔には何の関心もないようだ。

「どうせ電気とか水道とか、そうゆうので使ってるんやろ？」

きっとそうなんだろう。

頭では理解できても、どういうわけかオレは塔が気になってしかたない。

「そんなことよりさ、171（イナイチ）の靴屋のあとにネットカフェができたんやって！」

そう言って振り返ったハツミの鼻のまわりには、茶色のソバカスがいくつも浮いていた。高校生のくせにつけ睫毛して、髪は脱色しすぎて痛みぎみ。制服着てなかったら高校生にとうてい見えない。

なのに、どういうわけか、

「今から行ってみいへん？」

そう誘われると断れない自分がある。

たとえ、着ている制服が「いつ洗濯した？」っていうくらいにヨレヨレだったとしても・・・。

あの塔 [2]

それにしても気になる。

今日までいろんな人にあの塔のことを訊いてみた。

でも、誰ひとりとしてオレが納得できる答えを返してはくれなかった。

「よしっ！」

今日こそ、あの塔がなんなのか見に行ってみよう。

そうすれば、この気になってしかたない気持ちはおさまるだろう。

オレはママチャリにまたがって塔に向かい出発した。

近道したつもりが行き止まりだったり、道が急に違う方向へ曲がって遠回りになったりしたので、思ったよりも遠かったが、それでも30分後には塔の前にたどり着いていた。

窓の無い塔の周囲にはフェンスが張られていた。

いつから手入れされていないのか、錆びたフェンスに無数の蔦が絡まっている。

そばには古びた看板が立てかけられていた。

近づいて何が書いてあるのか読もうとしたが、雨風にさらされて文字はほとんど消えていた。

「なんだ・・・」

せっかく来たのに、目の前の塔に関する手がかりが何ひとつない。

少し離れて見渡すと、フェンスの一角に、人ひとり通れる程度の穴が空いていた。

幸い辺りには誰もいない。

ここまできたのだ。思いきって入ってみることにした。

穴から敷地に入り込むと、敷地内は意外に広くこぎれいだった。

外観からすると敷地内も雑草に覆われていそうだったが、中にはちゃんと人が通れる小道があり、除草されているような痕跡もある。

やはりここはハツミが言っていたように、電気とか水道とかの施設なのだろうか？

倉庫なら表の通りに面して塔への入口があるほうが便利だろうに、それもない。

塔の裏側に回って、やっと塔の中に入るための鉄扉が見つかった。

すっかり錆びきっていて、おまけに蔦が扉全体を隠すように覆っているから開きそうにない。

とりあえず塔を一周してみたが、他に入口らしきものも、この塔が何であるのかを知る材料になるものも、何一つとして見当たらなかった。

あきらめかけて、何気なく錆びついた鉄扉を軽く右足で蹴り上げたときだった。

閉ざしていた鉄扉が何の抵抗もなく内側に開いた。

力いっぱい蹴ったわけではない。

ほんの少し押した程度なのに開いたということは、もともと鍵はかかっていなかったのか。

少し気味の悪い気分を味わいながら、それでも何か引力のようなものに引っ張られて、オレは塔の中に足を踏み入れた。

あの塔 [4]

塔の中はがらんとしていた。板張りの床に埃が積もっているだけ。

埃の上には足跡も無いから、長い間、ここには誰も足を踏み入れていないに違いない。

塔の奥には光がさす一角が見えた。

自然に体がそちらへ向かう。

「・・・」

そこは光の差す庭だった。

広い庭だ。中央には巨大な噴水があり、水が滔々と吹き出している。

周囲は手入れされた庭木に覆われていて、庭の奥には宮殿のような美しい建物が佇んでいる。

中世のヨーロッパに迷い込んでしまったような光景だった。

「おまちしておりました」

突然、背後から男の声がした。

びっくりして振り返ると、そこには『執事』と呼ぶにふさわしい格好の、初老の男が微笑みを浮かべて立っていた。

「どうぞこちらへ。『姫』がお待ちでございます」

どこからか甘い花の香りが流れてきた。

その香りを嗅いだ途端、頭がふわっと軽くなり、急になにもかもがどうでもよくなった。

とりあえず執事について行ってみよう。

執事はオレを宮殿の内部へと誘った。

宮殿の壁には豪華な絵画が飾られていて、天井には巨大なシャンデリアがぶら下がっている。

磨きあげられた大理石の廊下。どこまでも続いているように見える回廊。

しばらく歩いて辿り着いたのは、一面に赤いカーペットが敷きつめられた広間だった。

広間の奥には、映画やテレビでしかお目にかかったことが無い王座があり、そこに金髪のオンナが座っている。オレは執事にオンナのそばまで行くよう告げられて、ふかふかのカーペットの上をふらふらしながら歩いていった。

王座の近くまで行くと、刺繍が施された豪華な青いドレスを着たオンナが顔を上げ、オレに向かって微笑みかけた。

「待っていたわ」

そのオンナは、ハリウッド映画から抜け出してきたような物腰でオレに語りかけた。

顔立ちは整っていて、美人・・・といえば美人だし、肌も白いし、スタイルも悪くない。

ただ、すこし年がいつているように見えた。30か、もう少し上。

そんなことを考えながらぼんやりしていると、オンナは静かに自分の身に降りかかった不幸を語り始めた。

遙か昔（まだ伝説とか魔法とかが世界にあったそんな頃）に、世界を支配していたオンナは、悪い魔法使いに呪いをかけられ、執事と共にこの塔に封印されたという。

それは年もとらず、外にでることも叶わず、永遠に生きつづけなければならないという恐ろしい呪いだった。

呪いはオンナの夫となるべき男がこの塔を訪れ、オンナにかけられた封印を解かなければ未来永劫続くというものだったため、オンナは気が遠くなるほどの長い時間、自分の伴侶となるべき『王』の来訪を待っていたのだ。

そして、今日、オレが塔の扉を開いた。

だからオンナは、オレが王なのだと言い、ただちに自分と婚姻を結び、塔にかけられた封印を解くよう命令した。

「封印を解いたら、どうなるわけ？」

まだ頭がクラクラしたが、話を聞いているうちに、すこしずつ思考が戻ってきた。

頬をつねってみても目がさめないところを見ると、どうやらこれは夢ではないらしい。

「呪いが消え、世界は正しい秩序の元動き始めるのです」

「正しい秩序？」

「王制が復活し、我らがこの世界の覇権を握る者となるのです」

何故、オレはこんなところに来てしまったのだろうか。

目の前にいる金髪オンナは正気だろうか？

「そなたは王になりたくないのですか？」

王になれば、たぶん学校なんて行かなくていいのだろう。

もちろん大学に進学しなくてもいい。就職もなしだ。

よく見れば、オンナは少し年はいってるかもしれないけど美人だし・・・。

「なりたいたら？」

甘い香りがよりいっそう濃くなり、また頭がぼうっとなった。

だが、ふいに、ソバカスの浮いたハツミの笑顔が脳裏に浮かんだ。

「なりたくない」

オンナは微笑み続けている。

「なりたくない？」

オレはまわりついてくる甘い香りを頭を振って追い払い、もう一度言った。

「なりたくない」

オレは返事を待たず、王座に背を向けて来た道を引き返した。

後から慌てて執事が追いかけてきたけど、どうやら呪いとやらが解けない限り、向こうはオレに触れられないようだ。

塔を出ると、何もしていないのに勝手に錆びた鉄扉が閉まった。

いつの間に時間が経ったのか、日が微かに傾いていた。

オレは塔の前に止めておいたママチャリにまたがって、塔を後にした。

あの塔 [6]

翌日の通学途中。

「おっはよ～」

背後から、鼻がつまったようなダミ声が聞こえてきた。

振り返ると、そこにはいつもにまして化粧が濃いハツミの姿。

でもオレは思う。

あの金髪オンナより、ずっと可愛い。

見上げた東の空には相変わらずあの塔が建っていた。

一見真新しいアパートだった。

一人暮らしには贅沢すぎるほどの広さを兼ね備えた一室。

トイレ、バス付き。フローリングの床はまだ新しく、傷一つ無く光っている。

家賃は格安。一人暮らしの私には魅力的な物件だった。

ところが、いざ契約して入居してみると、外からは見えなかった不便さが徐々に見えてくるのだった。

それは、部屋の片隅にある閉じられた扉に原因があった。

金具で開かないようになっているその扉の上部から、水が漏れてくるのだ。

そもそもこのアパートは、以前は学校だった建物を改造し格安で貸し出された。

私はその安さに惹かれて入居したのだが・・・。

ぽとっ、ぽとっ。

漏れ出した水は、壁を伝い、扉の取っ手のところで雫になって床に滴り落ちる。

たぶん上の階の配水管が水漏れをおこしているに違いないのに、アパートの管理人に訴えても一向に修理してくれる気配が無い。

しかたなく、はじめは取っ手の下に洗面器を置き滴る水を受けていたが、見栄えが悪く思えたので、鉢植えのみかんの苗を買ってきて置いてみた。

するといい按配に鉢の上に水が落ちて、みかんの苗は成長し始めた。

だが、もともと植木の手入れに関心の無い私は、肥料をやることもなく、みかんの苗を放置した。

なのに苗はどんどん成長し、半年後には私の背丈と同じくらいの大きさになって、大きな実を枝につけた。

大きくなりすぎた木はもはや邪魔にしかならなかったが、実をつけているのを発見すると、なんだか愛しい気分になって処分する気が失せてしまった。

枝からぶら下がる実は数えて7つ。

ほとんどが丸い実だったが、ひとつだけ奇妙にゆがんだ形の実が生っていた。

その実は細長く垂れ下がり、先端部分には五つの突起が生えていて、それがさらに下へと垂れ下がっていた。

いったい中はどうなっているのだろうか？ 不思議な実だった。

欠けた左手 [2]

そんなある日、唐突に管理人が私の部屋を訪れた。

以前言っていた、扉の水漏れを調べにきたのだという。

管理人は扉と天井の境目を調べたあと、脇にどけてあったみかんの木に目を止めた。

そして生っている実の中からいびつな形の実をみつけると、突然大きな声を上げたのだった。

「おお、こんなところに！」

震える片手で管理人は実を握り締め、断りも無く枝からもぎ取ると、涙をながして実に頬づりした。

あまりに異様な光景だったので、私は何も言うことができず、ただ立ち尽くすしかなかった。

管理人は奇妙なみかんの実を抱いて、私の部屋から出て行った。

欠けた左手 [3]

みかんの実がきれいに色づき、そろそろ食べごろかと思われた頃、今度はアパートの設備管理を委託された業者が水漏れを調べにきた。

やはり原因は天井部の配水管に原因があるとわかり、修理が行われたのだが、その際、一時的に水を止めるため、外に設置された給水タンクを調べたところ、その中からあるものが発見された。

それは腐乱した人の手だった。

警察の調べによると男の左手だという。

その話を聞いた時、誰もが最近見かけることの無い管理人を思い出した。

管理人の左手は欠けていた。

警察は管理人を捜したが、管理人が見つかることはなかった。

居酒屋で、オレと同僚の野崎はビールを飲みながら焼き鳥を食べていた。

「これからどうする？ デンセンにでも行くか？」

隣のテーブルですっかり出来上がっていたオヤジ三人組の会話が耳に入ってきた。

でかい声は店中に響いていたが、本人たちは気づいちゃいない。

「いいねえ～、デンセンしばらく行ってないんだよお」

「駄目だ駄目だ。オレ、勝手にデンセン行くと母ちゃんにしかられんだ・・・行くなら自分も連れて行って」

「黙ってりゃばれやしねえよ」

「それが駄目なんだ。デンセン行った次の日は必要以上に頭の回転が早くなるもんだから、すぐにばれちゃうんで・・・オレ、普段はポーっとしてっからよお」

新しくできたキャバクラかなんかの名前だろうか？

呆れながら一緒に飲んでいた野崎に目配せすると、

「デンセンかぁ。いいなぁ、オレもいきたいなぁ」

うっとりとか何かを思い浮かべるようにつぶやいている。

「なんだお前も知ってるのか？」

たずねると、びっくりしたように目を見開いて言う。

「新来町のアレだよ」

「・・・アレ？」

「銭湯だよ」

銭湯というと、今はもうほとんど見かけないが、子供の頃に小銭を持って両親と入りに行った、あの銭湯のことだろうか？

「驚いたな。お前、まだ行ったことないのか？」

野崎はテーブルの上に、電気の『電』と『泉』という文字を人差し指で書いた。

「ないけど、そんなに有名なのか？」

「有名も何も、いまどき『電泉』を知らない奴がいたとはね」

ふと気づくと、周囲が静まり返っていた。

視線を感じて見回すと、周りにいたオヤジ達全員が驚愕の表情を浮かべてオレを見ている。

カーッと頭に血が上り、頬が赤らむのを感じた。

「まあ仕方ないさ。お前、先週まで仕事のヤマだったもんな。ここ1年、ほとんど休みなしで会社と家の往復だったんだ。お前が頑張ったおかげで大口の受注が取れたわけだし、それに関しては感謝しているんだよ」

そう言いながら、野崎が周囲のオヤジたちに愛想笑いを振り撒くと、オヤジたちは納得したように頷いた。

中には哀れむように「大変だったんだなぁ。ご苦労さん」と声を掛けてくるオヤジまでいた。

「じゃあ、どうせだから、この人を今晚『電泉』に連れて行っちゃどうだね？」

隣テーブルの、ついさっきまで母ちゃんにしかられるとかなんとか言っていたオヤジが身を乗り

出して提案してきた。

「そうだ、それがいいよ」

何時の間にやら赤の他人ばかりのはずの居酒屋は、オレの『電泉デビュー』の話で盛り上がりだしていた。

結局、オレは野崎とともに、急かされるように居酒屋をあとにした。

店を出る時、自然と拍手が沸きあがり、オレの胸は嬉しいような恥ずかしいような気持ちでいっぱいになった。

野崎の言うままに、オレたちは店の前でタクシーを拾い、そのまま『電泉』に直行する。

ほどなくタクシーは新来町に到着し、俺たちは『電泉』がある場所に向かった。

タクシー及び自動車などの車両は、夜間は交通規制で『電泉』の周辺1km以内に近付けないという。

闇に覆われた空を見上げると、色とりどりのスポットライトが上空の雲を照らし出していた。

「ほら、あそこだ！」

野崎が足を止めた先には昔の銭湯さながらに、三本の湯気マークが入った銭湯ののれんがはためいている。建物の外観も、子供の頃に近所にあった銭湯とさほどかわらないように思えた。

「さ、行こうぜ」

背中を押されてオレは歩き始めた。

・・・ところが。

三歩もいかないうちに、背後から聞き覚えのある子供の声が聞こえてくるのではないか。

「あ、パパ！！」

振り返ると、そこには妻と二人の幼い息子がいた。

「ア、アナタ・・・」

妻の顔は真っ青だった。

オレは瞬時に、妻はオレに『電泉』のことを隠していたのだと確信した。

そして、オレに何も告げず、密かに子供たちを連れて『電泉』に来ていたのだということもわかってしまった。

「お前、オレをのけ者にしていたのか！」

オレは頭に血が上って、まともな思考を保てそうに無かった。

怒りに任せて手を振り上げると、妻は咄嗟に二人の子供たちを抱きしめた。

「違うのよう。アナタの仕事に区切りがつくのを待ってたら、子供たちが学校でいじめられると思って！」

事情を察した野崎が、オレと妻の間に入った。

「まあまあ、少し冷静になろうよ。・・・な？」

振り上げたまま行き場を無くした手をしぶしぶ降ろすと、妻に抱きしめられていた子供たちが、口々に妻を庇った。

「パパ、怒らないで！ デンセンに連れて行ってって言ったのはボクたちなんだ」

「学校でデンセンに行ったことが無いって言ったら、みんなが馬鹿にするから・・・」

一生懸命に訴えるわが子を見ているうちに、怒りが消えていくのがわかった。

「そうだったのか・・・。すまなかったな」

謝ると、妻と子供たちはホッとしたように緊張した表情を緩めるのだった。

「さて、一件落ち着いたようだし、そろそろ電泉に行かないか？」

野崎はわざと明るい口ぶりで言い、『電泉』の入口を指差した。

「パパ、行こうよ！」

子供たちが私の手を引き、妻も優しく笑っている。

私は頷き、『電泉』の入口に足を向けた。

その夜、初めて体験した「電泉」での数時間は、噂どおりの素晴らしいものだった。

奇妙なサウナ [1]

最近、通っているサウナがある。

冷え性や肌荒れによく効くと評判を聞き、はじめて訪れたのが2ヶ月ほど前のこと。

幼い頃から体が冷えやすく、冬になると足先の冷えに悩み続けていた私は、冷え性解消の為にスポーツジムに通ったり、マッサージに行ったり、食事療法に挑戦したりと様々な方法を試してきたが、どれも目に見える効果が出ず長続きしなかった。

ところが、今通っているサウナは通常のサウナより少し室温が低いせいか、長時間過ごしやすく、入った後にも体に温かさが残っているのが実感できて、やみつきになってしまった。

白い霧に包まれたサウナ室で天然保湿成分が含まれているという蒸気を吸い込むと、肌だけでなく体全体が潤うようで幸せな気分になれた。流行の癒し効果というやつだろうか。

今では私の生活に無くてはならないものになっていた。

奇妙なサウナ [2]

そうして通いつけているサウナだが、いくつか不思議に思うことがあった。

それは、いつもバイトの女の子が変わっているということだった。

サウナの営業時間は午前9時から深夜の25時まで。

そのうちのどの時間帯に行っても、40半ばの優しそうな女性店長が、常にカウンターで出迎えてくれるのだが、店長の横でアシスタント的な仕事をしている女の子が、いつ行っても別の人に変わっているのだ。

私が通っているのは週に一度なので、シフトの関係でたまたま違う人が入っている時に行ってしまうのかもしれないが、そんなに多くのアルバイトを雇えるほど経営が上手くいっているようには見えないのだ。

いつ行っても私のほかにいる客は多くて4人。私しかいないときも多い。

私がいなかった時間帯に多くの客が出入りしているのかもしれないが、それにしたって、設備の維持費や人件費などを考えると儲けは多くないはずだ。

それなのに、いつもバイトの女の子が違っているというのはどういうことだろう？ 時給の割りに仕事内容が厳しく、みんなすぐに辞めてしまうのだろうか・・・？

それと、もう一つ不思議に思うこと。

それは"サウナの天井はどこに繋がっているのか?"ということだった。

天井と壁の間には20cmほどの隙間があって、隣にある部屋と天井が繋がっていた。

それだけなら特に気にもならないのだが、時々その隣の空間から人の気配がするのだ。

最初は昔の銭湯のように男性用のサウナ室と繋がっているのかと思っていたのだが、なんとなくそうではない気がした。

サウナ室内は私語厳禁だが、遠慮のないオバさんたちや初めて訪れたOLは、注意する店員がいなくなると、おしゃべりをはじめてしまう。そういう声は小声でも案外よく響くものだ。

だが、隣の部屋からはそんな声がまったく聞こえてこない。

ただ人の気配だけが濃密に漂ってくるのだ。

奇妙なサウナ [3]

そんなある朝、心と鏡を覗くと、頬のあたりにうっすらと黒いしみが浮き出していた。

なんだろう？

このところ仕事が忙しかったから疲れが出たのだろうか。

だが、そのしみは翌日になっても消えることはなく、より一層濃くなっていた。

とうぜん会社に行くと、同僚にしみの事を聞かれた。

化粧でカバーしようとしても、あまりにも濃いしみなので隠しきれない。

慌てて皮膚科に行ったが原因がよくわからない。

とりあえず、しみを抑える効果のある薬をいくつか処方してもらったが、検査の結果がでるのは一週間後と言われ、鬱々と日々を過ごした。

そうこうするうちに週末になり、少しでも気分転換になればと、いつものサウナに行った。

「いらっしゃいませ」

頬を隠しながらサウナに入った。

すると不思議なことに、サウナから出て鏡を見ると、頬のしみが綺麗に消えていたのだ。

驚きながらも、体の血行が悪かったからしみができたのだと勝手に解釈して満足だった。

その日は数日ぶりに安心して眠ることができた。

奇妙なサウナ [4]

ところが、サウナの効果は長く続かなかった。

サウナに行ってから3日はしみが消えていたのに、4日目の朝には再びしみが頬に浮き出していた。

しかも前より濃くなっている。

私は会社を休み、皮膚科へ行った。

検査の結果が出ていたが、異常は無いということだった。

特別な原因が考えられないので、しばらく様子を見ましようと言われ、以前と同じ薬を渡された。

だが、その薬が効かなかったことは私が一番よく知っている。

薬にもすぎる気持ちでサウナに向かった。

「いらっしゃいませ」

いつものように店長が私を迎えてくれた。

なりふりかまわずサウナに飛び込むと、やはり、しみは綺麗に消えていくのだった。

だが、どうしてサウナに行くとしみが消えるのだろうか？

頬のしみは一体何なのだろうか？

安堵とともに、疑問がわきあがってくる。

根本的な原因を解決しなければ、またしみは蘇ってくるのではないか？

そして、その恐れは現実のものとなる。

今度はサウナの効果は2日しかもたなかった。

私は慌ててまた、サウナに飛び込んだ。

「いらっしゃいませ」

サウナに入ると、またしみは綺麗に消える。

だが次は1日しかもたなかった。

どうしよう？

会社では私の様子がおかしいと噂になっているようだった。

いつ顔にしみが浮き出してくるかわからないから、鏡ばかりが気になって仕事にも集中できなくなっていた。

だから会社帰りにサウナに寄るのが日課になった。

「いらっしゃいませ」

あいかわらず店長以外のバイトは入れ替わりが激しい。いつも知らない顔の女の子になって

いる。

「お疲れのようですね？」

はじめて店長のほうから私に話しかけてきた。

「少し」

頬のしみを見られないように俯きながら答えていた。

「お疲れの時は、少し入浴時間を長くしてみるといいですよ」

店長のすすめにしたがって、それまで1回1時間にしていた入浴時間を2時間に変えてみた。

かえって体が疲れるのではないかと思ったが、意外と平気で、気のせいかより一層効果が上がったような気がした。

それから3日はしみが顔から消えていた。

それ以降、私のサウナに通う頻度と、サウナに入浴する時間はどんどん増えていった。

サウナに行かなければ、しみは濃くなり広がっていく。

しかたがないので会社を休む。

サウナにいる時間が長くなると、とうぜんお金もかかる。

でもサウナに行くのを止めるわけにはいかないから、食事を削ってでもサウナに行く。

そうしているうちに、私は会社をクビにされてしまった。

それでもサウナ通いを止めることができない体になっていた。

奇妙なサウナ [5]

ある日、サウナに行くと、店長がいつものサウナ室ではない場所へと私を案内した。

「長時間ご利用のお客様専用、個室をご用意しております」

店長が案内したのは、女性用サウナのさらに奥にある部屋だった。

サウナに入る支度を済ますと、店長が部屋の壁に並んだ幾つかのドアうちのひとつを開き、「どうぞ」と私を中へ誘った。

そこは狭い個室で、天井と壁の間にわずか20cmほどの隙間があるだけの薄暗い部屋だった。

女性用サウナの隣の部屋はこの個室だったのか・・・と考えながら見回していると、部屋の片隅に藁のようなものが積まれているのに気が付いた。

一瞬、それが微かに動いたような気がしたのだが。

「蒸気に含まれる天然保湿成分をたっぷり含んだ"葦"になります。熱くなっていますので、お手を触れないようお気をつけ下さい」

よく見れば、確かにそれは蒸気を発していて熱そうだった。

「では、ごゆっくり」

以降、私はいつも個室に案内される常連になった。

だが、会社をクビにされ、入ってくるお金のあてもなくなったというのにサウナに入り浸る毎日が続けば、近い将来、生活資金が尽きるのは目に見えていた。

どうしたらいいのだろうと悩んでいると、また店長に声をかけられた。

「もしよければ、うちでアルバイトしませんか？」

昼間はアルバイトとして働くかわりに、夜、客が少なくなったら自由にサウナを使ってもいいという提案だった。

すでにサウナ依存症になっていた私は、まさにうってつけの職場が見つかったことを喜び、すぐに店長の申し出を受け入れた。

翌日から昼間はバイトとして働き、客が少ない時間帯にサウナに入る生活が始まった。

しかし、やがてそれだけでは満足できなくなって、夜もサウナの個室で眠るようになった。

日に日にサウナに入っている時間は長くなっていったが、不思議なことに店長は何の文句も言わず、サウナの個室を私に使わせつづけてくれた。

そして、とうとう最後の日がやってきた。

奇妙なサウナ [6]

その朝。いつも朝は早くに起きて開店の準備をしなければならないのだが、私はいつまでも起き上がることが出来ず、サウナのなかで朦朧としていた。

すると、サウナの外から人の声が聞こえてきた。

店長の声だった。

起きなくては・・・仕事をしなくては追い出されてしまう。

だが身体は少しも動かない。

「どうぞ」

サウナのドアが開き、ドアの向こうから見知らぬ女性が中に入ってきた。

女性は部屋の中をぐるりと見回した後に、あれは何ですか？ と、私を指差してドアの入口に立つ店長に尋ねた。

「蒸気に含まれる天然保湿成分をたっぷり含んだ"葦"になります。熱くなっていますので、お手を触れないようお気をつけ下さい」

店長の声がとても遠かった。